

都道府県番号	19
都道府県名	山梨県

【 】

学校名及び規模

学校名	塩山市立井尻小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	1	7	12
児童数	20	23	22	21	24	26	1(4年)	137	

研究の概要

(1) 研究主題

「意欲的に取り組み、自ら追究する児童の育成」
～ 個に応じた学習指導方法の充実を通して ～

(2) 研究主題設定の趣旨

価値観の多様化した社会となった今、教育の場においても個性を重視し、基礎的・基本的な学習内容の定着を中心に据えた上で「確かな学力」を向上させることが求められている。「確かな学力」とは、知識や技能はもちろんのこと、それに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたものであるととらえる。知識や技能を十分に身に付けていたとしても、「自ら学び自ら考える力」が育っていなければ、その知識や技能は有効に機能していないことになる。様々な力が複雑に関連し合っていることを意識し、総合的にバランスのとれた質の高い学力を身につけさせていかねばならない。

「生きて働く学力」を向上させるためには、自らの手で追究し「わかった」「できた」という成就感や満足感をすべての子どもに味わわせることが重要であり、それとともに、子どもたちの学ぶ意欲も高まっていくと考える。児童一人一人の実態に応じた学習指導方法の工夫・改善など、きめ細かな指導体制の充実を図り、さらに意欲的に自ら追究する児童を育成したいと考え、本主題を設定した。

研究の概要

(1) 研究推進体制の工夫

今年度、本校では「子ども主体の学習」「個人差に応じる学習」を実践するための手だてとしてTTを導入し、授業方法の工夫・改善を図ることを中心に研究を進めてきた。子ども一人ひとりを複数の指導者の眼によって見取り、個に応じたきめ細かな指導を通して基礎・基本の定着を図るとともに、子どもたちが学ぶ楽しさを味わえるようにするためである。

組織としては、低・中・高学年ブロックからなる授業作り研究部を設け、新たにTT研究部、実態調査研究部を立ち上げた。児童の理解の状況に差が出やすい3～6年生の算数科と、これまでの研究成果を生かし、さらに研究を深め「生きて働く学力」を身に付けさせるために1・2年生の生活科に教科を絞り、次の仮説を立て研究に取り組んだ。

◇ 研究仮説

算数科・生活科において、児童の実態に応じて学習指導方法を工夫し、一人一人に成就感、満足感を味わわせることができれば、学習意欲が高まり、生きて働く学力を向上させることができるであろう。

なお、研究のポイントとなる「学習指導方法の工夫」を次のように考えた。

子ども一人一人の実態の把握

算数科における指導の個別化、生活科における学習の個性化

TTの導入

個に応じた指導のための教材開発

- ・基礎的基本的な内容の確実な定着を図るための教材開発
 - ・「子ども」「学校」「地域」の実態に即した特色ある教育課程の編成
- 評価を生かした指導方法の工夫・改善
- ・肯定的評価の重視

(2) 研究の実際

「育てたい子ども像」「身に付けさせたい学力」等について共通理解を図るとともに「学力」「基礎・基本」「少人数指導」「習熟度別学習」について理論研究をし、さらに児童の学習及び生活に関しての意識の調査結果をふまえ、TTを中心とした個に応じた学習指導方法、指導体制の工夫・改善を図ってきた。

実践事例1 ヒントカードをもとにした小集団学習(5年算数科「小数のわり算」)

これまでのTTの授業は主な進行をT1が行い、学習の見通しが立てられない子にT2が指導したり、単元によって役割分担を交替したりするなどしてきた。ここでは、一人一人の思考をさらに大切にするために小集団学習を取り入れた。

本単元では、小数でわることの意味をとらえさせ、自分なりの計算のしかたを考え、自分の言葉で説明できるように学習を進めた。小数のわり算は、数直線を用いたり、単位を変換したり、計算のきまりを用い整数化して単位を共通化したりするなど多様な解決方法がある。本時ではヒントカードを用意し、子どもたち一人ひとりに適切な支援ができるよう配慮した。授業後半でヒントカードをもとに、同じ考えをもった子どもたちが小集団になって話し合いをし、お互いの考えを高めることができた。

研究を深める中で、T1とT2ができるだけ授業中に子どもたちの学習状況の情報交換をし、絡み合うことの必要性和、互いに遠慮することなく児童の実態にあった指導を進めていくことの大切さを確認した。

実践事例2 異学年合同の課題別学習(1・2年生活科「とびだせ いじりっ子 あき」)

本単元は、第1・2学年の合同学習とし、担任とTT支援教諭との3人体制で行った。加えて、改訂された生活科は特に身近な人々とのかかわりを重視しているので地域に住む学習ボランティアに共に活動していただく中で、子どもたちが主体的に活動や体験をして、自らの学びを広げていくことができるように配慮した。一例として、「ころ柿名人に弟子入り」の学習では、地域にあるころ柿農家に4グループに分かれて出かけて行き、実際にころ柿作りに挑戦した。1年生でも大きな柿を手に、夢中になって皮むきに励む姿があった。

子どもたち一人ひとりの思いや願いを大切に、「課題別」「興味・関心別」のグループ編成を可能な限り細分化した追究活動を展開することができた。学習ボランティアは地域の人達であり、身近にそれらの人達と深くかかわることで、子どもたちの学習意欲が高まった。また、年間指導計画の中で、1・2年の合同学習を単元を決めて取り組むことにより、お互いに刺激を受け学習に広まりや深まりが見られた。来年度に向け1年生の中には、新1年生との活動へ思いをはせる子も出てきている。今後も継続していきたい。

実践事例3 コース別の学習の実施(4年算数科「およその数」)

本単元のねらいは、概数の意味を知らせ、目的に応じて概数処理ができるようにしたり、概数を用いることのよさをとらえさせたりすることである。本時では四捨五入して概数にするときの表現のしかたや、四捨五入するときに着目する位について理解させた。ここでは、同一学級内でのコース別学習を取り入れた。本校のコース別学習は習熟度に応じて行うものではなく、授業における原理獲得後の理解を深める段階で自分にあった学習コースを選択するというものである。実施にあたっての基本的な考え方としては、

- ・どんな学習をするコースなのかの説明を受け、自己の判断のもとにコースを選ぶ。
- ・コース別学習は、一人ひとりに応じた学習を一層進めるものとする。
- ・コースは固定されるものではなく、自分の学習状況によって変更できる。

とし、次の2コースを設定した。

じっくりバッチリコース：友達と考えを出し合いながら細かいステップでじっくり考えるコース

すらすらガッチリコース：友達と意見交換しながら自力解決学習を中心に取り組むコース

コースを選択する場面ではほぼ予想通りの構成でスムーズにできた。自信のない子どもも友達と考えを確かめ合うことによって自信をつけることができた。また、他コースでは何

をしているのかもわかり安心感があつた。

(3) 研究の成果と課題

TTの導入にかかわって

TTを導入したことによる成果としては、児童の見取りが複眼的かつ多面的となり、机間指導やノートのチェックなどを通し、より確かに個々の児童の実態や学習状況を把握し、その共通理解と連携により、個に応じた指導を進めることができたこと、また、子どもの興味・関心や理解の速さなどの実態、単元や学習過程によって柔軟かつ多様な指導形態を考へることができ、授業展開のバリエーションも増えたことである。子どもたちもわからないままであることが少なくなり、学習に対してより積極的になり次の学習を楽しみにしている。算数の教具もT1、T2が相談しながら分担して作り、学年別整理棚に保管しておくようにした。学年間での使い回しもでき、次年度の学習や研究にも役立つと思われる。

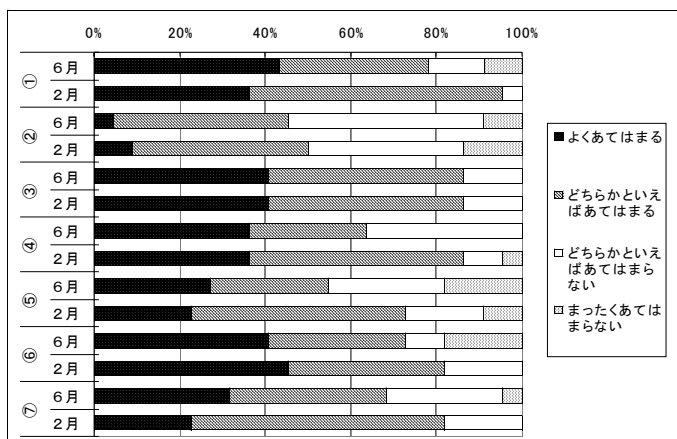
課題としては、TTによって子どもに手をかけ過ぎてしまうことがあげられる。待つべき時はどんな時か、支援すべき時はいつなのか、どういふ方法がいいのかなど、効果的支援ということについて研究を深めたい。また、設定はしたもののTTの打ち合わせ時間を確保できない状況がある。単元の指導計画立案時に十分な打ち合わせをし、さらに、TTの履歴として「TTノート」を作り、指導と評価の一体化を意識し、子どもたちの反応、理解の様子、意欲等を記入するようにしていきたい。さらに、授業の中でそれぞれの教師のもっている感性がぶつかり合うことも必要であるという指導助言をいただいているので、共通理解を図る中で取り組んでいきたいと考へる。

TTについての調査結果

(3年生22名)

調査項目

- ①勉強の内容がよくわかる
- ②進んで手をあげて答えている
- ③先生や友だちの話をよく聞いている
- ④自分の力で学習問題を解決しようとしている
- ⑤わからないことなど先生に聞きやすい
- ⑥2人の先生に教えてもらえることでその教科が好きになってきている
- ⑦2人の先生が教える授業を楽しみにしている



学習コースの選択

コースに分かれることで、理解に時間がかかる児童も授業の中でフィードバックする時間を確保することができ、個人差に対応することができた。また、この学習形態で学ぶことで、一人一人が安心してじっくり問題に取り組めるようになってきている。

コミュニケーション能力の育成

思考の次元をより高めていくために、子ども同士が討議する場を設け集団思考させ、活気ある授業を展開させたい。教材研究をより深め、子どもたちがどこでつまづくかを想定し授業を考へていく必要がある。現在、子どもたちのコミュニケーション能力の育成ということでは今一つという状況であり、自分の考へや思いを言ったりお互いに質問し合ったりするような学習展開を目指したい。

個に応じた指導方法を工夫し実践する中で手応えを感じている状況にある。授業の基礎は「わかった」「できた」「おもしろかった」「役に立つ」である。このことを視点にして授業づくりをすることにより子どもたちが学ぶ楽しさを味わい、意欲の向上につながっていくことを授業研究などを通し再確認できたように思う。今後も具体的な活動の場面で生じた疑問やとまどいにきめ細かに対応し、TTのよさを生かして学習指導の充実に努めていきたい。

(4) 研究成果の普及の方策

- * 小規模学校での学力向上のためのTTのあり方について、研究発表会を2004年10月に実施する予定
- * 山梨県学力向上推進協議会ならびに峡東地区学力向上推進協議会への資料提供

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	1 5 年度からの新規校	1 4 年度からの継続校		
【学校規模】	6 学級以下	7 ~ 1 2 学級		
	1 3 ~ 1 8 学級	1 9 ~ 2 4 学級		
	2 5 学級以上			
【指導体制】	少人数指導 一部教科担任制	T・Tによる指導 その他		
【研究教科】	国語	社会	算数	理科
	生活	音楽	図画工作	家庭
	体育	その他		
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	

【特色ある取組事例としての紹介したいポイント(都道府県教育委員会記入)】

T T を中心にした取組

- ・算数や生活科のT T 指導の効果的な指導の在り方を追求する中で、T T 指導のよさを生かした多様な指導形態や授業展開の工夫をした実践例がみられる。さらに、着実な研究実践を通じて、T 1、T 2 のかわりなどの在り方や授業改善に生かす教師の履歴としての「T T ノート」の作成など、次年度への課題が明確に示されている。